

# 人と技術で語る天気予報史

古川 武彦著

現代の天気予報は、物理法則に基づいて気象の変化を計算する「数値予報」で行われている。

日本で数値予報が本格的に始まったのは1959年、IBMの大型計算機が気象庁に導入されたときだ。計算速度では今日のノートPCにも遠く及ばない、真空管を用いた計算機だった。

本書は同じ年に気象庁に入庁した著者が、日本の数値予報黎明期を振り返った本である。話は明治初期の天気予報黎明期から始まり、国内外の数値予報前夜を経て、計算機導入へと至る。地上での観測中心だった時代から高層の気象データとの組み合わせへ、そして数値予報へと変遷していった技術や時代背景が描かれている。

「人と技術で語る」とあるように研究史だけではなく、関係者たちの回顧録や手紙、インタビュー、そして著者自身の思い出などで構成されている。気象研究そのもの



(東京大学出版会・3400円)

▼ふるかわ・たけひこ 40年生まれ。気象庁予報課長、札幌管区気象台長などを歴任。

## 記録の時代の導入計算機

が青春時代を迎えていたのかもわからない。そんな時代の雰囲気を感じられる一冊である。

ただし、決して読みやすい本ではない。話題が前後したり繰り返したりする一方で、門外漢には話題の繋がりが分かりにくいところもある。専門的な話題も頻出する。万人におすすめでできる本ではない。せめて年表だけでも付して欲しかった。

だが他の技術分野でもこういう本を出して欲しいとも強く思った。本書では、気象庁の予報官たちの考え方や文化を構築した先人たちの姿、初めての大型計算機導入のための予算獲得や電源確保や運搬のあれこれ、そして経験を重視していた現場の予報官の「まじい」なども克明に描かれている。半世紀以上前の当時は若かった高名な研究者たちの思吹と情熱を感じることができぬ。

人は、たとえ当事者であっても多々のことを忘れてしまうものだ。まして当事者たちが亡くなってしまえば、その「まじい」も忘れてしまうこともある。よけいだけの話を時代の記録として残してくれたものだと思う。話がすっきり整理されていないところも、それはそれとして味わいながら読むことをすすめた。

サイエンスライター

森山 和道